

氏名(本籍)	やまぐちわか 山口若菜	(東京都)
学位の種類	博士(文学)	
学位記番号	博甲第4876号	
学位授与年月日	平成21年3月25日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当	
審査研究科	人文社会科学研究科	
学位論文題目	蘇軾の詩学思想と創作	
主査	筑波大学教授	博士(文学) 松本 肇
副査	筑波大学教授	博士(文学) 小松 建男
副査	筑波大学教授	博士(文学) 芳賀 紀雄
副査	筑波大学講師	博士(文学) 稀代 麻也子
副査	筑波大学教授	文学博士 堀池 信夫

論文の内容の要旨

本論文は、「道草」という視点から、宋の蘇軾の詩学思想と創作について論じたものである。構成は以下の通りである。

序論

第一編 詩学思想

第一章 行雲流水の詩学

第二章 達意と修飾

第二編 複眼の文学

第一章 視点の発見

第二章 苦痛の力

第三編 道草の文学

第一章 愚痴の快樂

第二章 無駄の価値

第三章 レトリックの道草

第四編 余裕の文学

第一章 俗中の美——いびきの詩

第二章 再生の文学

結論

序論は、吉川幸次郎氏が『宋詩概説』で提示した「巨視の哲学」、および山本和義氏が「蘇軾詩論稿」で提示した「委順の思想」という見方について触れながら、本論文の目的が、蘇軾の文学を「道草の文学」という視点から考察することにあることを述べている。

第一編は、「道草の文学」の予備的考察として、蘇軾の創作態度と創作の方針について論じている。第一

章では、蘇軾が「謝民師推官に与うる書」の中で、理想的な詩文を「行雲流水」にたとえて、「定質」すなわち決まった姿がないと述べていることに注目する。蘇軾は、構想が自然とわき上がってきたときに、一气呵成に作れば、生気にあふれたよい作品ができると考えていた。一气呵成に作ったものは、行雲流水のように脈絡に自然な流れを備えている。著者によれば、定まった形をもたず自由自在に変化する行雲流水の思想は、蘇軾の詩学思想の中心であると同時に、蘇軾のものの考え方の基本となり、彼の複眼的な視点や道草を肯定する思想の基盤となった。第二章では、蘇軾が行雲流水の文学観から、詩文のすじみちに無理のないことを求めたことを指摘する。

第二編は、蘇軾の「道草」の発想の根源である複眼的なものの見方について論じている。第一章では、蘇軾が複数の視点から世界をとらえ、また視点の基準を逆転させることによって、固定観念を崩してゆくことを論じる。「行雲」は、つねに形を変えている。形を変えるものの全体像をとらえるためには、視野を拡大する必要がある。そのため、蘇軾は詩を作るときに、固定した一点からものを見ることをせず、みずからの視点をさまざまに変化させ、複数の視点を発見した、と著者は指摘する。また、蘇軾の「巨視の哲学」は、複眼的な視点を基礎としている、と述べている。第二章では、詩人は困窮することによって詩が上達するという考え方に基づいて、詩人の現実生活における苦しみと、自由に表現する喜びについて論じる。

第三編は、この世に無駄なことはないとする蘇軾の文学を、「道草」という視点から論じている。第一章では、蘇軾の愚痴の詩を取り上げる。蘇軾はつらい状況に置かれ、越えられない障壁や行き詰まりを感じると、愚痴を言いながら詩を作った。蘇軾の愚痴の詩には、予定していたコースをはずれても、それぞれの道筋で楽しみや幸せの要素を見つけて拾い上げようという、道草を積極的に肯定する考え方が表れている。著者によれば、蘇軾の「道草の文学」は、蛇行しながらまわり道をするように見えるけれども、いつか必ず海まで到達する川の流れを自然な姿と考える、蘇軾の基本的な態度に基づいているという。第二章では、蘇軾が中途半端で、不足に見えるものや、無駄で役に立たないと思われるものにも見るべき価値があると考えていたことを指摘する。第三章では、蘇軾の詩における比喩表現が、詩にうたう内容の全体像を述べる際に、作者の中から自然と生み出されるものであるために無理な技巧を感じさせないことを指摘する。

第四編は、「道草の文学」の発展として、蘇軾の文学における余裕の精神について論じている。第一章では、蘇軾のいびきの詩を取り上げる。著者は初めに、いびきの詩の先行用例について検討する。次に、蘇軾のいびきが「不平」のイメージから「安心」のイメージに転換したこと、および、いびきの「安心」のイメージが蘇軾の後継者に受容されていったことを指摘する。いびきという通俗的な題材に美の可能性を見出すユーモアの文学は、蘇軾の余裕の精神の表れである、と著者は述べている。第二章では、蘇軾が、他人の詩と同じ韻を用いて詩を作る次韻の手法を、過去の自分の作品に適用した例を取り上げる。蘇軾は、過去の道りをつねに意識して振り返る心の余裕を持っていて、旧作を再利用することにより、過去の作品に新たな光を当てて再生させたのである、と著者は指摘する。

結論は、本論文の独創性が「道草の文学」という視点によって蘇軾の文学を解明したことにあることを述べている。

審査の結果の要旨

本論文は、蘇軾の文学を「道草の文学」という視点から考察し、「道草の文学」が、「行雲流水のごとく、初めより定質無し」という蘇軾の詩学思想と密接に結びついていることを明らかにした。

本論文の特色は、蘇軾が文学論の中で用いた「行雲流水」の語によって、彼の人生観を説明したことにある。蘇軾の文学論と人生観については、それぞれ多くの論文が書かれている。しかし、本論文のようにその両方を結びつけて論じる試みは、これまで行われたことがなかった。

蘇軾は、逆境に生きた詩人である。本論文で著者は、蘇軾の逆境に生きる知恵の根拠を「道草」という考え方に求めている。「道草」は、効率を重んじる立場から見れば、無駄なものにすぎない。しかし、一方、「道草」から大きな収穫が得られることがあるのも経験的な事実といえる。無駄は、蘇軾にとって逆境を克服する突破口となるというのが、著者の考え方である。本論文で著者は、「異郷の孤独」「多忙な仕事」「転勤生活」「病気の悩み」などを例に挙げて、一見まわりみちと思えるようなことから、人生を充実させる喜びの材料となることを丹念に論じている。「道草」を楽しむ蘇軾の態度は、人生に対する楽観的なものの見方を反映している。そして、楽観的なものの見方で知られるのが、唐の白居易であった。蘇軾は、白居易の楽観的なものの見方をさらに発展させた。その根底にある蘇軾の人生観を、著者は「道草」という考え方で説明することによって、蘇軾の特色を明らかにしている。

著者は、「道草の文学」を軸として、「複眼の文学」や「余裕の文学」について論じている。とりわけ、「道草の文学」の集大成ともいべき「余裕の文学」において、次韻詩といびきの詩を取り上げていることは重要である。著者は、蘇軾の次韻詩の中に自分の生活を作品化したものがあることに着目し、その意味を追究している。また、題材としていびきを取り上げた作品に注目して蘇軾における詩語の創出について考察している。著者は「鼻息」（いびき）という日常卑近の言葉が蘇軾によっていかに詩語にまで高められたのかについて丹念に論じた。

具体的描写の底にあるものを捉えようとし、蘇軾にとっての表現行為の意味を明らかにしようとする著者の真摯な態度は、文学研究者の資質として不可欠のものといえる。

本論文には、文化的な意義についての理解が十分でないためか、文章の解釈が表面的にとどまっていると思われる箇所がやや見られる。こうした点を克服することが、著者の今後の課題となる。

以上のような課題は残されているけれども、蘇軾研究の重要な業績である、吉川幸次郎氏の「巨視の哲学」と山本和義氏の「委順の思想」に加えて、「道草の文学」という新たな視点を提示したことはまことに大きな意義がある。蘇軾の「道草」は、苦しい世の中を絶望しないで生きていくための知恵であったという著者の指摘は、蘇軾研究の発展に寄与するものとして高く評価することができる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。